

テュルク系諸民族の民間叙事詩について

西脇 隆夫

一

いわゆるテュルク系諸民族とは、シベリアのヤクート自治共和国から小アジアのトルコ共和国にかけて居住し、四十数種の言語を話す数千万の人々を指すが、ここでは、中央アジアから西北中国に住む諸民族の叙事詩について考えたい。⁽¹⁾

また、叙事詩についても、狭義の叙事詩である英雄叙事詩に加えて、神話叙事詩、宗教詩（または教訓詩）、愛情物語詩などを含めて考えると、口承文芸の研究において、多くの興味ある問題が見出せるのである。

西北中国のテュルク系諸民族、ウイグル族、カザック族、キルギス族、ユーグ族などには下段のような叙事詩が伝えられている。

カザフ族だけでも二百篇以上の叙事詩が伝えられているように、ここで掲げた作品は、愛情物語詩の代表的な例であるにすぎない。

これら十一篇のなかで、A、F、Jの主な内容は以下のとおりである。

〔作品名〕

〔民族名〕〔転生モ〕〔結末〕

チーフ

A	タイトルとゾフラ	ウイグル	有	悲劇
B	ゲリッブとセネム	ウイグル	有	幸福
C	バルハットとシーリン	ウイグル	無	悲劇
D	オルリカとゲムノジャン	ウイグル	無	幸福
E	カンマルシャとセンムスジャン	ウイグル	無	幸福
F	コズケルベシとバヤンスルウ	カザック	有	悲劇
G	セリム湖の伝説	カザック	有	悲劇
H	サリカとサマン	カザック	無	悲劇
I	カルカマンとマムール	カザック	無	悲劇
J	クルムルザ	キルギス	有	悲劇
K	ホアンタイチエン	ユーグ	有	悲劇

A 「タイトルとゾフラ」(ウイグル族)

ずつと昔、孔雀河のほとりにハンババという国王がいた。国王とその大臣は五十すぎだったが、子どもがいなかったので、実のなら

ない木のように感じていた。

ある日、お后は夢の中で鹿が胸の中に飛び込んで来るのを見ると、子どもをみごもり、ゾフラが生まれた。いっぽう、大臣の妻も夢の中でタカが頭の上に飛ぶのを見ると、子どもを身ごもり、タイルが生れた。二人の子どもが成長すると、タイルは賢い若者になり、ゾフラはバラのように美しい娘に育ち、互いに愛し合うようになった。

ところが、家臣の一人である邪なバトールがゾフラに横恋慕し、二人の仲を裂こうと計った。国王が狩りに出かけた時に、タイルの父である大臣もお伴をしたが、バトールは密かに大臣を弓で射殺してしまった。そして、バトールは国王に巧みに取り入り、タイルの悪口を告げ、国王はタイルを罰として木の箱に入れ河に流す。

タイルが河に流されてから、ゾフラは病に倒れ、その病状は日ごと悪くなる。国王やお后が慰めても、ゾフラの苦悩は少しも癒されない。そこで、園丁の娘アワハンはタイルを探しに出かけ、四十日かかって、ルーム国で助けられていたタイルに出会う。

タイルはゾフラの様子を聞くと、ただちに国にもどり、ゾフラのもとを訪れる。再会した二人が互いの気持ちをうたっている、その歌声を耳にして、怒ったバトールが現われるが、タイルの剣で殺されてしまう。だが、タイルも捕えられて、国王に処刑され、ゾフラはその後を追って死ぬ。人々は二人を孔雀河の畔にある山の頂に埋葬する。

孔雀河の畔の山に

艶やかなバラの花が咲く

白色のバラはタイル

赤い色のバラはゾフラ

F 「コズケルベシとバヤンスルウ」(カザック族)

サルバイとカラバイという二人のバイ(金持ち、牧畜主の意)が、子どもの生まれる前に、結婚の約束をする。コズケルベシの父サルバイは、みごもっている雌鹿を弓で射つたために、神に罰せられて狩りの途中で死んでしまう。コズケルベシは孤児となり、家はしだいに貧しくなる。

このため、カラバイは婚約を解消し、娘のバヤンスルウをモンゴル部落のコダールに嫁がせようと考えて。コダールが自分のウマ九万頭を助けてくれたからである。そこで、部落の者たちを率いて、アルタイ山の南麓からシル河の流域一帯に移動してしまう。

バヤンスルウは、愛する恋人コズケルベシが自分を追って来れるように、移動する道に沿ってめじるしを残し、コズケルベシは苦労を重ねてようやくバヤンスルウを探しあてる。

二人が再会の喜びに浸っているとき、カラバイはコダールに命じてコズケルベシを殺させてしまう。バヤンスルウは悲しみと怒りのうちに、自らコダールを井戸の中に誘い込み石をつめて殺し、恋人のかたきを討つ。その後、剣で自殺する。二人の墓からはポプラの木が生えてきて、先端が一つにからまり、コダールの墓からはサボテンが生えたという。

J 「クルムルザ」(キルギス族)

金持ちのカオジャムジャルの娘アクサトゥケンは、貧しい羊飼

クワタの息子クルムルザと愛し合っている。しかし、カオジャムジヤルは二人の仲に反対し、娘を金持ちの年寄りに嫁がせようとする。

二人は密かに会い、互いに自分の気持ちをうたう。しかし、そのとき、アクサトゥウケンの叔父がテントの中に飛び込んで来て、刀でクルムルザを突き殺してしまう。

アクサトゥウケンは、山中に埋められたクルムルザの遺骸を探し出してから、愛の忠節をまっとうするため、刀で自害する。

二人の墓から二本のハンノキが生い出て

その枝葉はとわに緑

二人の墓から二すじの泉が湧き出て

その水は二人の愛のように甘い

二本のハンノキはしっかりとからみ合い

二すじの泉は合わさって溪流となる

これらの叙事詩には、いくつかの点で共通する特徴があり、カザック族の「コズケルベシとバヤンスルウ」を例にして示せば、まず、修辞上の特色の一つに、語句の繰り返し⁽³⁾がしばしば行なわれている。

あの二人のバイのアウル（牧畜村）は移って行った

子どもを一人、しきりに望んでいた

妻が二人とも娘を手に入れるなら

仲の良い姉妹にしようと決めた

あの二人のバイのアウルは移って行った

子どもを一人、しきりに望んでいた
もしもわしらに息子が生まれたなら

二人を友だちにしようと決めた

あの二人のバイのアウルは移って行った

子どもを一人、しきりに望んでいた

息子一人、娘一人が生まれた時には

神が一緒にされるなら、わしらもそうしようと決めた

詩歌や語り物において、語句の繰り返しは珍しいことではないが、カザック族の叙事詩ではしばしば三連にわたって繰り返されている点に特徴がある。

また、キルギス族の「クルムルザ」では、毎行末尾に「ジャネム（私の愛しい人の意）」あるいは「サトゥウケン」という語が加えられている。民謡における囃し詞のようなものであるが、カザック族の他の作品にも同じような例が見られる。

カザック族では、アーケンという民間詩人の存在がよく知られているが、これら叙事詩の修辞上の特徴は、アーケンたちが叙事詩を語っている状況を反映しているとも言えよう。

次に形式上の特色としては、「コズケルベシとバヤンスルウ」では、各連が四行、毎行の音節数が十一音節で構成され、一、二、四行が押韻されている。これは「カラヨリン」という、カザック族の民謡で代表的な形式である。押韻も一音節だけでなく、しばしば毎行末尾の三音節か四音節の韻を踏んでいる⁽⁴⁾。

「コズケルペシとバヤンスルウ」の異文は十六種あることが知られ、その行数も千九百行から二万行まで多様である⁽⁵⁾。

その発生年代については、八世紀から十世紀までに遡る説も出されているが、だいたい十三世紀から十四世紀にかけて成立し、十八世紀から十九世紀にかけて、現在のような形になったとされている⁽⁶⁾。しかし、叙事詩の発生年代を決定することは容易でなく、現存の作品の中にも、天の崇拜に見られるシャーマニズムの痕跡、コズケルペシとコダールの争いに反映された部落・部族間の争い、イスラム教の用語など、古い要素と新しい要素が混在していて、今後の課題として残されている。

むしろ注目すべきことは、題材、あるいは内容における特色であり、これら叙事詩が、男女の悲恋物語、特に「悲恋転生譚」になっている点である。

二

いわゆる「悲恋転生譚」は、次のような要素によって構成される。
(1) 相思相愛の男女がいて、二人の仲を肉親、権力者に妨害される。

(2) 男女のいずれかが殺されるか自殺したために、残された者もその後を追って死ぬ。

(3) 二人は死後に植物、石、鳥などに転生する。
この「悲恋転生譚」は、アールネ・トムソンの「昔話の型」に採録されていないことでも明らかのように、日本では昔話でなくて伝

説に見られ、世界各地では、語り物、叙事詩の形で伝承されている例が多い⁽⁷⁾。

西北中国のテュルク系諸民族においても、前掲の十一篇の叙事詩の中で、A、F、G、J、Kの五篇が「悲恋転生譚」となっている。これら五篇の叙事詩における、登場人物および転生モチーフは、次のとおりである。

〔作品名〕		〔転生モチーフ〕		〔妨害者〕		〔主人公〕	
A	タイルとゾフラ	花赤・白のバラ		父・恋敵		大臣の子と王女	
F	コズケルペシとバヤンスルウ	木(ボブラ)		父・恋敵		牧畜主の息子と娘	
G	セリム湖の伝説	泉・湖		父・恋敵		牧畜民の息子と娘	
J	クルムルザ	木(ハンノキ)	・泉	父・叔父		牧畜民の息子と金持ちの娘	
K	ホアンタイチェン	白鳥		奴隸主		牧畜民の息子と奴隸の娘	

同じ「悲恋転生譚」とは言っても、このように登場人物の設定、転生モチーフの内容、物語の筋が細部の点では一致していない。それぞれ、無関係で独自に伝承されていたかのようなのである。

では、その他の叙事詩との関係はどうであろうか。

他の六篇は「転生」のモチーフが無いことで共通しているが、さらに結末によって二つのグループに分けられる。

(a) ハッピーエンド——B、D、E

(b) 悲劇的な結末 —— C, H, I

(a) のグループに属する叙事詩は、結末だけから判断すると、「悲恋転生譚」とは関係ないように思われる。転生のモチーフは、当然のことながら、ハッピーエンドでなく、悲劇的な結末にしか伴わないからである。

D の「オルリカとゲムノジャン」は、末子が成功する「三人兄弟」型を物語った叙事詩である。そのあらすじは、このようになっている。

「父の国王の命令で、三人の王子が話のできるオームを探しに出かける。末の王子ゲムノジャンは仙女オルリカと出会って、愛し合うようになる。オルリカは王子のためにオームを手に入れてやる。しかし、途中で会った兄の王子のため、ゲムノジャンは眼をえぐられて谷間に捨てられてしまう。兄たちはオームを連れて国王のもとへ帰るが、オームによって自分たちの悪業がすっかり話されてしまい、ゲムノジャンは助けられて仙女オルリカと結婚式をあげる」

E の「カンマルシャとセナムスジャ」は、求婚者による難題解決を物語った叙事詩である。その主な内容は次のとおりである。

「王子カンマルシャは夢の中で美女を見かけ、愛するようになる。美女は、遙か遠くの草原にある国の王女セナムスジャナだと告げる。王子は三年かけて、その国まで行き、国王シャバルクデイの花園に住みこむ。園丁が国王に王子の思いを話すと、国王は、四十日の間に沙漠に花園のような宮殿を作るよう難題を課す。愛し合うようになつてた王子と王女が困って泣いていると、花の王である赤バラが助けてくれ、難題を解決し結婚する」

以上のような内容のDとEの作品は、いずれもあるタイプの昔話をもとに作られた叙事詩であつて、「悲恋転生譚」とは直接に関係することはないように見える。ところが、EはBの「ゲリッブとセナム」と合わせて考えると、物語の展開において、「悲恋転生譚」であるAの「タイルとゾフラ」と共に、同じ土壌で生み出された叙事詩のようである。

「国王アッパースの娘セナムと宰相の息子ゲリッブは愛し合っているが、宰相の死後、国王は奸臣のざん言を信じて二人の婚約を破棄し、ゲリッブ一家を異郷に追放する。王女セナムはゲリッブのことを思つて病気になる。国王は娘を慰さめるために豪華な花園を作つてやる。ゲリッブはセナムに会うため、人夫に紛装して花園に来る。ある日、花園に来たセナムは、ゲリッブと再会する。最後に、ゲリッブは奸臣を殺し、セナムと結ばれる」

「ゲリッブとセナム」は、登場人物の設定では「タイルとゾフラ」と基本的に同じであり、花園が恋人の再会場となっている点で「カンマルシャとセナムスジャナ」とも似ている。また、三作とも宮廷が舞台になっている点で共通している。

宮廷が舞台になっている点では、Cの「バルハットとシーリン」も同じであるが、この作品は、古代ペルシャの叙事詩「ホスローとシーリン」の翻案物、ウイグル版である。

したがって、ウイグル族の民衆の間に伝えられていた伝説をもとに再創造したとされているが、物語の構成はペルシャの作品と基本的に一致していて、ペルシャ的な色彩の濃厚な作品となっている。このような作品が、「タイルとゾフラ」などの作品の出現に大きな

影響を与えていると思われる。

しかし、ペルシャにおいては、「ホスローとシーリン」「ライラとマジュヌーン」など、ロマンス叙事詩が少なくないが、なぜか「悲恋転生譚」は見出せない⁽⁸⁾。皆無ではないかもしれないが、代表的な作品では伝えられていない。その理由は、イスラム教の教義に抵触するなど宗教上の制約か、神秘主義的な傾向が好まれ、死後に人間以外の何物かに転生するというモチーフは忌避されたためかもしれない。

ウイグル、ウズベク、カザック、キルギスなど中央アジアのテュルク系諸民族の多くはイスラム教を信仰しているが、「悲恋転生譚」を伝えている。これらの説話がイスラム教受容に関係なく、民衆の間に広く流传していたためかと思われる。

ウイグル、ウズベクの「タイルとゾフラ」は、物語全体がペルシヤ、イスラム文化の色彩が濃厚にも関わらず、「悲恋転生譚」になっているのは、それがテュルク固有の文化を核にして伝承されてきたためではなかろうか。

今なお遊牧生活を営み、テュルク固有の文化の伝統を保っているカザック、キルギスには、「悲恋転生譚」が本来の形で伝わっていることが多いが、悲劇的な結末のみで終わっている、Hの「サリカとサマン」のような例もある。

「可汗の娘サリカは、父の部将サマンを愛しているが、二人の愛は可汗に認められない。二人が密かに会っていると、可汗の派遣した兵士に見つけれ、サマンは争いの中で重傷を負い、サリカは連れもどされてテントの中に押しこめられる。三カ月後、サマンは傷も

なおり、サリカのもとへ向かうが、サリカは恋人を失ったと思い自尽しており、サマンもその後を追って死ぬ」

また、Iの「カルカとマムール」も悲恋の物語であるが、やはり「転生」のモチーフがない形になっている。

「金持ちマンベッタの娘マムールは男装を好み、誰からも縁談を申し込まれないが、これまで通婚したことのない部落のカルカマンと愛し合うようになる。カルカマンがマムールを家に連れて来たため、両家族は争う。ある日、マムールは実家にもどる途中、一族の長老に弓で射殺されてしまい、カルカマンは遠方へ逃げ去る」

この作品は、十八世紀の二十年代に実際に起きた事件をもとに叙事詩に作られたものとされている。だから、死後に転生するというような幻想的なモチーフは用いらなかったであろう。ただ、このような作品から、民衆が「悲恋転生譚」を物語った叙事詩を喜んで聞く現実的な背景を伺うことができるのである。

ところが「サリカとサマン」は同じく悲劇的な結末でありながら、「転生」のモチーフはなぜか見られない。

ある資料によれば、恋人たちが前後して自殺した後、「若い魂を小鳥に変えて、この悲しみに満ちた世界から脱け出させよう」と述べられている⁽⁹⁾。この叙事詩はもともと「転生」のモチーフを具えていたのかもしれない。何らかの理由で、現在のテキストでは失なわれているように感じられる。

Gの「セリム湖の伝説」は、民間伝説をもとに作られた叙事詩である。この物語は、バイ(牧畜主・金持ち)の娘、じつはバイに奪われて養女にされたピソラと、バイのために放牧しているアフマッ

トが愛し合うが、バイの手下どもとの争いの中で二人とも傷ついて死ぬ筋になっている。

前掲の表では、「悲恋転生譚」の例に入れてあるが、じつは物語の末尾で転生モチーフが明確に述べられているわけではない。

民間伝説が「現代」という時点で再創造されているため、物語の重点は恋人たちが悲劇的な結末を迎えた原因、二人の仲を妨げる牧畜主と牧畜民たちの争いを描くことに置かれている。このために、転生モチーフはやや曖昧にされたものと思われる。

「サリカとサマン」や「セリム湖の伝説」は、もともと「悲恋転生譚」を物語にしていた叙事詩が、転生のモチーフを失ない、いわゆる悲恋物語になろうとする過程を示している。「サリカとサマン」ではどうやら叙事詩が採集され、整理され、翻訳される段階で、転生のモチーフは欠落して、現在のような物語になったようである。

「コズケルベシとバヤンスルウ」は、その異文によって、「悲恋転生譚」の物語の他に、転生のモチーフはないが悲劇的な結末であるものの、転生のモチーフもなくハッピーエンドで終わるものがあり、三種類に分けられる。十六種の異文では、転生モチーフのあるものも多く、他の二種類はそれから変化したものとされている。

したがって、悲恋物語がすべて「悲恋転生譚」と関係があるとは言えないが、少なくともテュルク系諸民族の叙事詩においては、ある作品は何らかの理由で転生モチーフが失なわれて、現在のような形になったようである。

三

テュルク系諸民族の叙事詩の中には、口承文芸の他のジャンル、特に昔話でも同じ話を見い出せる作品がある。例えば、ウイグルの「チン・トゥミール」、カザックの「エル・トゥスティック」「アルバメス」、キルギスの「エル・トゥスティック」「ジャニシとジャクシ」などである。

「悲恋転生譚」でも昔話の中に同じ題材の話が見出される。ユーグ族の「ホアンタイチェン」のようにほとんど同じ内容のものもあるが、転生モチーフについて見ると、いくつか興味ある点に気がつく。まず、ウズベク族の「タヒルとチュフラ」は、題名からウイグルやウズベクの叙事詩「タイルとゾフラ」と関係がある民話だと、すぐ分かる。¹⁰⁾

物語の内容は叙事詩とかなり違っている。子どものいない国王と宰相が老人からもらった赤いリングを妻たちに食べさせると、子どもが生まれること。国王は生まれたのが女の子なので殺させようとする。こと。末尾で、タヒルが処刑される場面のその後を追うチュフラの描写が詳しいこと。

転生のモチーフについて見ると、二人の墓から赤いバラ、白いバラが生えてくるのは叙事詩と同じであるが、二人の仲を妨害したカラバトゥールも死後に二人の墓の間に埋められて、そこから黒いイバラが生えるが、赤と白のバラにおさえられてしまう。

他の資料によれば、漢語訳のテキストは末尾がかなり省略されて

いて、叙事詩でもやはりカラバトウールが黒いイバラに転生して死後も妨害しようとすることが描かれている¹¹⁾。

同じくウズベク族の「シーリン姫」も、古代ペルシャの叙事詩「ホスローとシーリン」のウズベク版「ファルハットとシーリン」と関係のある民話と言えよう¹²⁾。

ただし、物語の内容はかなり違っているし、特に末尾がペルシャの叙事詩とも、ウズベク、ウイグルの叙事詩とも異なっている。

民話の末尾では、愛し合うファルハットとシーリンが洪水に襲われ、ファルハットは石像に化し、シーリンはシルダリアに注ぐ河に化すとされている。

「タイルとゾフラ」の転生モチーフとは異なっても、この民話が「悲恋転生譚」になっていることは確かである。ペルシャの叙事詩も本来は「悲恋転生譚」ではなかったのかと考えたくなる例となっている。

カザック族の「コズケルペシとバヤンスルウ」も民話として伝えられている¹³⁾。結末は悲劇であるが、転生のモチーフは欠如している。

では、チュルク系諸民族における「悲恋転生譚」の叙事詩にはどのような特色があるのだろうか。

その「悲恋転生譚」について、世界の他の地域、東アジアの例と比較することによって明らかにせよう。

いわゆる「悲恋転生譚」の構成は前にも示した三つの要素で成り立っていて、要するに悲恋物語に転生モチーフがあればよいことになる。悲恋物語の内容は多様であるため、民話のタイプとしてまと

められるほど、一定していない。

転生モチーフについてはどうであろうか。世界各地に広く伝わっている例では、愛し合う男女が死後に別々に埋葬されても、その墓・塚から植物（木・花・ツタなど）が生えて一つにからまるというモチーフが多い。

これに対して、東アジアのある地域・民族（具体的には西南中国のチベット、イ語系民族）では、死後に鳥となることと火葬のモチーフが見られる。仮に前者を世界型、後者を西南中国型とする。

(a) 世界型 転生モチーフ 植物（花、木、石、岩、泉、河など）

(b) 西南中国型 転生モチーフ 植物→鳥+火葬

火葬か土葬などは、それぞれの民族の葬制に関係して、説話にとっては二次的な要素かもしれない。そうだとすれば、西南中国における「悲恋転生譚」の最大の特徴は、転生の繰り返しと、鳥への転生であろう。別表にまとめたように、物語の基本的な構成は、他の地域の例と共通している点が多いからである。

また、西南中国の諸民族では叙事詩よりも民話で伝承されていることが多い。

西北中国のチュルク系諸民族では、「悲恋転生譚」は、西南中国の例と共通する点が少ない。つまり、前掲の例で言えば、「世界型」に属すると言えよう。

ユーク族の「ホアンタイチエン」では、死後に白鳥に化すモチーフとなっているが、これはチュルク系諸民族の「悲恋転生譚」に固有のものではなさそうである。

〔中国諸民族における悲恋転生物語〕

	タマツとタルザレル	塩茶の物語	めおとの虹	桃のちぎり	梁山伯と祝英台
民 族	チベット	チベット	イ	ナ シ	漢
地 域	四川省・アパ	四川・カム	貴州省	雲南省	四川、浙江など
反対者	伯 母	父（土司）	頭 目	継 母	父、兄
死 因	男 弓矢で射殺される 女 火に入る	左に同じ	斬殺される 火に入る	火に入る 湖に投身	病 死 墓に入る
埋葬地	山の中腹・頂上	川の両側		湖の東と西	墓
植 物	シェンルウ・スヨ	木	木	木	
転 生	サ ゴ 鳥	小 鳥	ツ ル	オシドリ	蝶、鳥
迫 害	鳥を射殺、木を焼く	鳥を射殺	鳥を射殺		
再転生	鳥	塩と茶	虹		

ユーク族は確かにテュルク系の民族ではあるが、甘肅省に居住し、チベット文化の影響を受けている。

その「ホアンタイチェン」は、チベット・イ語系の諸民族の「悲恋転生譚」の影響を受けているものと思われる。

また、特定の場所と結びつけて語られていることも、西南中国の民話にはなく、西北中国の叙事詩に見られる特色である。

ウイグルの「タイルとゾフラ」では、恋人たちの埋められるのが孔雀河の畔の山とある。孔雀河は、新疆ウイグル自治区のタリム盆地北東部を流れ、ロプノルに注ぐ河である。また、ある資料では、孔雀河の畔の山とは鉄門関の山頂とされている。

カザック族の叙事詩では、「セリム湖の伝説」がセリム湖にまつわる物語であるし、「コズケルベシとバヤンスルウ」でも、二人の埋葬されたのはアヤグス（現在のカザフ共和国に同名の都市がある）と語られている。また、同地には、二人の墓だとされる遺物が残されている。

このように、「悲恋転生譚」は、叙事詩、語り物で伝えられる例が多い一方で、ある特定の場所の植物とか岩にまつわる伝説として残されている。

日本では叙事詩、語り物でなくて、むしろ伝説として全国各地に見出される。女夫松、夫婦石などが「悲恋転生譚」に属するもの、と考えられるが、断片で物語として語られているものは多くない。文献としては、すでに中世の謡曲に見られ、「定家」、「求麻」、「女郎花」などがある。

中国では文献の例として、長詩「焦仲卿の妻」や『搜神記』の中

の「韓憑の話」など、三世紀にまで遡ることができ、それらは特定の地名と結びつけられ、伝説として、語り物として伝えられているようである。

西北中国のテュルク系諸民族においては、「悲恋転生譚」を物語る叙事詩は、固有の文化をベースにして、遊牧民の間で語られている作品（「コズケルベシとバヤンスルウ」、「クルムルザ」などカザック族、キルギス族の叙事詩）とイスラム・ペルシャ文化の波を被り、オアシス都市の民衆の間で語られている作品（「タイルとゾフラ」など、ウイグル族、ウズベク族の叙事詩）に分けられる。

これらは、転生モチーフの点で、西南中国の例よりも、英国のバッド、中世フランスの叙事詩「トリスタンとイズー」に近いものがあり、東西文明の流れの中から生み出されたことが伺われる。

注

(1) 公刊された作品の目録については、拙稿「西北中国諸民族の叙事詩について」〔島根大学法文学部文学学科紀要〕第一号掲載の予定）を参照のこと。

(2) これらの叙事詩は左記の資料に収められている。

A、阿布都克日本、井亜訳『塔依爾与佐哈拉』（四川民族出版社 一九八二年）所収

B、"Uyghur halq dastanliri" (維吾爾民間長詩選)

C、"Nizari dastanliri" (阿布都熱依木納扎爾集) (民族出版社 一九八五年) 所収、漢語訳 (新疆人民出版社 一九八二年) 所収

D、阿布都克日本、井亜訳『塔依爾与佐哈拉』（四川民族出版社 一九八二年）所収

E、阿布都克日本、井亜訳『塔依爾与佐哈拉』（四川民族出版社 一九八二年）所収

F、"Wrihar-naf 著作集" (アルマ・アタ 一九八四年) 所収

G、蘇力坦・米吉提『賽里木湖的伝説』（新疆人民出版社 一九八〇年）、『民間文学』一九八〇年第一期

H、山林、常世傑『薩里哈与薩曼』（新疆人民出版社 一九八〇年）、Khazir "Salikla-Saman" (民族出版社 一九八一年)

I、"新疆民族文学" 一九八五年第四期所載

J、"新疆文学" 一九八二年四月号所載

K、"民間文学" 一九八〇年第一〇期所載、『中国少数民族民間長詩選』（四川民族出版社 一九八五年）所収

(3) 前掲、「Wrihar-naf 著作集」第一卷、一二二頁参照。

(4) "哈薩克族詩歌格律"、『少数民族詩歌格律』（西藏人民出版社 一九八六年）による。

(5) "カザフ文学史" (アルマ・アタ 一九六八年) 第一卷二七四—二七八頁。

(6) 夏宇繼、木塔里甫「哈薩克愛情長詩」〔闊孜少郎与巴艷美女〕初探「民族文学研究」一九八五年第四期。

(7) 丁乃通の『中国民間類型索引』では、八五五頁に関連説話を収めている。

- (8) 「アラビアン・ナイト」第六八一夜の「オトバーとライヤ」は「悲恋転生譚」であるが、これはペルシャの詩人ジャーミーの「オイナトリヤ」にもとづくと言われるが、未見。

- (9) 毛星『中国少数民族文学』（湖南人民出版社 一九八三年）一七九頁による。

- (10) 「延河」一九五七年十二月号所載。

- (11) 『中国民族民間文学』（中央民族学院出版社 一九八七年）七〇一—七〇二頁。

- (12) 「延河」一九五七年十二月号所載。

- (13) 『カザフの民話』（アルマ・アタ 一九七九年）

(付記) 本稿は日本口承文芸学会の松江大会（一九八八年六月五日）での発表をもとにしたものである。

（にしわき・たかお／島根大学）